

『不安』、あるおばあさんとの対話から

先月、ある檀家さんの老婦人から寺に電話がありました。

「先生、最近よく主人が夜うなされまして大きい声で叫ぶんです。悪夢にとりつかれているみたいなんです。私も最近、死んだ両親や先祖が夢に出てきまして、私に会いに来るのです。これは多分、ここ数年お寺参りをしていないから、死んだ祖先や両親が怒っているんじゃないかと思います。どうか先生、私ら家族で寺にお参りしますので先祖の霊を慰めるために祈ってください、お経を上げてください。お願いします。・・・」

私は、そのおばあさんの訴えを最後まで聞いて次のように申し上げました。

「つまり、おばあさんは死んだ両親はじめ、先祖の靈魂がどこかにいて、それらがまだ成仏してないから、どうか坊さんの力で、お経の功德で、その靈魂のところが鎮まりますように、なんとかしてほしいということですね。おばあさんのその不安な気持ちはよ一わかります。ここで、はいわかりました、いついつお経をあげまっさかいこの日に来て下さいと、言おうと思えば言えますけれども、私も坊主の端くれ、お釈迦様の弟子として生きている以上、ここでまじめな話をいたしましょう。

そもそも、人が死んだら肉体と靈魂が分離して、その靈魂は草葉の陰かどこかにいつまでもいてはって、時折、今生きている人を悩ましたり、化けて出たり、夢となって出てきたり、祟ったりすると考えておられる方が仰山おられます。しかしそれはほんまでっしやろか。私は小さいころはともかく、幸いに仏教、つまりお釈迦様の教説に出会いましたお蔭で、そういった考えが迷いに他ならないと知らせていただきまして、そういう悩み、不安は一切ないのであります。これが私のひとつの幸せであります。つまり、人は死んだら、その死に方がどんな悲惨なみじめなものでありましても、またこの世に多くの未練、怨みつらみを残して死んでいったとしても、死んでしまったらみな、すべて生きとし生けるもののいのちのふるさとでありますこの大地、大海に帰っていくのであります。それを、仏教ではお浄土とも呼びますが、そこには生前の娑婆の差別うずまく苦しさ、悩みがあるはずはなく、一味平等寂靜の何のわずらいもない世界であると、私たち生きているものが感知できる世界であります。

ですから、亡くなったご両親をはじめ先祖の靈魂を鎮めるためにお参りし、手を合わし、お経を坊さんに読んでもらうというのは、全く間違った考えでありまして、無益なことです。寺に参るのも、手を合わすのも、お経を読むのも、先祖のためではなく、まさにそういう不安、迷いにおののいている自分自身が、

正しく仏教聴聞して、しっかりと、迷い、不安のない境地を間違いなく頂くためであります。『亡き人を案ずる心を縁として、亡き人から案ぜられている自分自身をしっかりみつめよ』というのが、法事を行う趣旨であります。

仏教におきましては、すべての亡き人は、どのような生き様、死に様でありましても、すべからく仏の世界の住人、つまり仏様とこちらからみていき、仏様としてのお心を静かに聴聞していくのです。そのような仏様が、生きている我々の前に化けて出てきたり、崇ったりするはずがないじゃありませんか。今こうしてまじめに仏様のお話を聞いていただきましたことも、おばあさんの無数の先祖が仏様となって働いている事実であります。お互いにただ合掌して、仏の教説を真摯に聞いて参りましょう。」

実際、何か不幸なことが立て続けに身に起こったりすると、これは何か先祖のどれかの霊魂がまだ成仏せずにいるからではなかろうかとか、いろんなことを思い不安を自ら深めるのがわれわれ人間ですね。つまり、迷いの世界、輪廻の世界を自ら作り出し、それに縛られているのです。私も、仏の教えに出会わなかったら、同じように何かと関連付けて恐れおののいたりして、中途半端に一喜一憂して過ごしていただろうと思います。

また、病院には「死」を連想させる4号室や、「苦」を連想させる9号室がないところも多いということを最近聞きました。さらに、葬儀の後、清め塩を渡される場合もあります。これらは、皆、死や苦をなるべく見ないように、自分に降りかからないようにと、死や苦を邪魔者扱い、蛇蝎視しているわれわれの根性です。これは、本当に悲しいことです。

しかし考えてみますと、人間はいろんなことに苦しむ存在であり、やがて否が応でも死ぬ存在でありますから、それから逃げずに、自らの今の苦しみ、不安の原因はどこにあるのか、また死来たれば死んでいけるように、普段から真摯に自分の心を耕しておくことが、なによりも大事な幸せなことと存じます。

日本の曹洞宗の開祖、道元禪師曰く、
『仏道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。』

仏道を歩むというのは、自分自身を見ていくことである。それは、自分がとらわれている考え、迷いから離れることである。それはつまり、普遍の真理にうなづいて生きることである。

自分を苦しめているのは、ちょっと見ると自分の外側にある様々な事象のせいであると、われわれは思いますが、仏教の祖師方は、「そうではない、あなたの内面が問題なのだ」とおっしゃいます。どんなことに遭遇しても、それによって悩まされ振り回されない境地を開発してくれるのが仏の教えであります。
(ご質問、ご感想をどうぞ下さいませ。 mikinakura@nifty.com まで。) 合掌